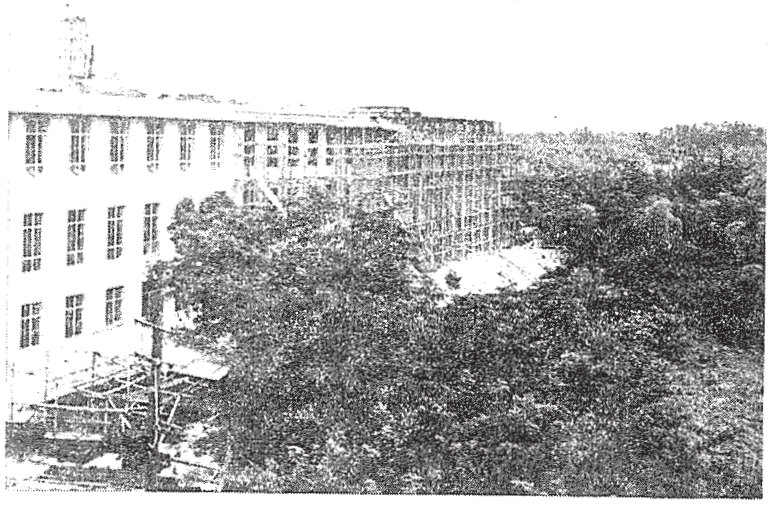
THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, Oct. 15th, 1954. No. 273.

關西大學學報

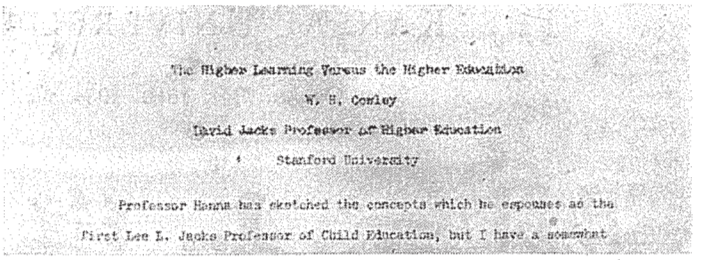
第 2 7 3 号

昭和29年10月



(緑の山に包まれた新築中の法文学舎)

關西大學學報局


The Higher Learning Versus the Higher Education

W. H. Cowley

David Jacks Professor of Higher Education

Stanford University

Professor Hanna has sketched the concepts which he expounds as the First Lee L. Jacks Professor of Child Education, but I have a comment

特別寄稿

大学の学問・対・大学教育

スタンフォード大学
ダビッド・ジャックス大学教育教授
ウイリアム・ハロルド・カウリー

ハナ教授は最初のリー・L・ジャックス児童教育教授として自己の抱負の概略を述べたが、私には些か違った仕事がある。大学教育の教授職とはどんなものであるかを知っている人々が少ないようにおもわれるので、二つのこと、即ち第一には教育一般の研究を論じ、次に大学教育の研究についての私の考えを述べることにしよう。こゝに撰んだ表題の意義は本論の終りになって明かとなるであろう。

あなた方の中には恐らく母親に「おかあさん、ペンギンって何？」とたづねた子供の話を聞いたことがあるだらう。「それはね、雪の中にすんでいる鳥の一種ですよ、でも、おとうさんに聞いて御覧」と彼女が答えると、「なーんだ、そんなこと聞いていやしないよ」と子供が言い返えした。私は本論中この子供のことを記憶に留めて置かう。

一

暫く大学（higher）という形容詞はさて措いて、学校、学部及び所謂教育機関で行われる機能を研究し維持することに関与している教授達に与えられる肩書としての教育（Education）という名称について考えてみよう。御存知の人もあるとおもうが、学科目（訳者註教育という）は初めから現在の名称であったが、任命は行われなかった。一八二六年アマスト大学の教授達が教育教授（Professor of education）を教授の一員として任命してほしいと提案したが、同大学では当時は勿論、百二十八年前に歎願がなされたにも拘らず、爾来そんな教授職を設けなかった。その歎願書はちょっと人に読ませる程うまいもので、「実際上極めて重要な学部があるが、財源の許す限り大学に附置さるべきものとおもわれる、即ち教育学（Science of Education）である。如何にこれがあらゆる改良の真の基礎となるかを考え、また如何に多くの教授職が文学その他の諸科学に設けられているかをみて、この精神文化の学問に殆んど注意が払われておらず、この太西洋岸に唯一人の教育教授もいない（恐らくいないとおもう）し、今までもいたことがないということは、洵に驚くべきことである」といっている。

二十三年後当時最も卓見な大学長であったブラウン大学のフランシス・ウェイランド学長が教育学部を同大学に設置するよう提案したが、惜しいことにそれを教授法学部（Department of Didactics）と呼んだので、資金獲得の努力が水泡に帰してしまった。教育学（Pedagogics）という名称も同様の反響をもたらしたので、教育学者達は「教授の理論と技術」とか、「学

ウイリアム・ハロルド・カウリー博士は、一八九九年生れ、ダートマウス（文学士）、シカゴ（哲学博士）、ハミルトン（法学博士）、ホバート（人文科学博士）、ユニオン（文学博士）等諸大学に学び、シカゴ大学就職斡旋課長、オハイオ州立大学心理学助教授及び同教授、ハミルトン大学長を歴任、現在スタンフォード大学教育学部において**大學教育學**を担当し、「大学教育の管理」、「大学教育行政」、「アメリカの単科大学と綜合大学」、「大学教育の構造、機能及目的」、「大学教育科目」、「大学教育職員の福祉増進事業」（いづれも四単位）等について講義し、将来の大学教授や大学教育行政家の養成につとめている。なお博士はカーネギー財団より大学教育に関する書物を著わすよう慫慂されている

本論文は本「關西大學學報」のため特に執筆されたもので、アメリカにおいても未だ発表されていないが、おそらく本年末か来年匆々オハイオ州立大学教育学部編集「大学教育論叢」に発表されることになるであらう。

博士が關西大學及び「關西大學學報」のため特に寄せられた好意に對し、衷心より敬意と甚深なる謝意とを表する。

校財政と教授法」とか、「教授の学問と技術」（15・1）とかいうような語句を代用させた。パウル・H・ハナスが一八九一年にハーヴァードで科目を初めて教えた時、彼の肩書が「教授の歴史と技術との助教授」であつたことは如何に冷遇されたものであるかをよく物語つている。

彼が受けた多くの批評のうち最も辛辣なものは、アメリカでも最も有名な哲学部にいて、ジェームス、ミュンスターベルグ、ロイスやサンタヤーナの同僚で極めて温厚なジョージ・ハーバート・パーマーのものであつた。ハナスがケンブリッヂ（訳者註ハーヴァード大学）に着いて間もなくパーマーに会つた時、パーマーは「ハナスさん、貴方に会えて嬉しい。西部からわれわれに教授法を教えに来て下さつた。いゝことではありませんか」といつたゞけで別れ、爾後二十二年間ハーヴァード大学教授としておりながら、二度とハナスを眼中に置かなかつた。

こういつた経緯の結果、一八二七年アマスト大学教授会によつて提案された名称が一般に採用されるようになつたが、不評判が続いている。理由にはいろいろあるが、その一つは明かに他の学科目の教授達も亦教育に関与しているのであるから、教育学者達は適当な肩書のない名称を勝手に使つているのだと信じているためである。われわれの名称が教育学部で教えていることを充分にあらわしていないことは確かである。名称を恐らく変えることはないだろうが、偶々数年前このスタンフォードで地理学の客員教授の妻君がうけた経験を想い出すと変更してもよいのではないかとおもう。

教授がその職について間もなく妻君が教授夫人クラブの会合に出席した時、先輩の一人が「あなたの御主人は何をお教えになるのですか」と尋ねたので、「地理です」と答えた。すると質問者は「地理ですつて、地理は小学校で終つてしまつたのだとおもつていましたのに」と声を高くしていつた。それから一ケ月後妻君は次のクラブ会に出席したが、今度もまた同じ質問をする人があるだらうと心準備をしていたら、案の条誰かゞ質問したので「私の夫は人間生態学を教えます」と答えると、「それは大層重要な学科目ぢやありませんか、ねえ」とにつこりして賛意を表した。

他の学部の教授達が殆んど教育を重要な学科目と考えなかつたのは残念なことである。中には全く学科目ではないとすら考える者もあつた。かくして当時のコロンビア大学哲学教授のニコラス・マリー・バトラが十九世紀後期に同大学で教育の課程を組織しようとした時、他学部の同僚教授達が文書を以て「教育という学科目はない」と抗議した。このような見解にも拘らず教育学部が殆んどすべてのアメリカの大学に設置されたが、学科目は大した意義がないという意見がいろいろな方面で多かつた。

教育学部の過小評価はわれわれが主に教師に教授法を教えることに集中しているという考えに幾分由来している。イースタン大学のある英文学教授が二三年前述べた通り、教育学者の役目は「教師に教授法を教えることを教師に教えること」（11）が一般に認めらる考えである。教育の教授と雖も他の科目の教授よりも遙かに教師としての技倆をもつているわけでないから、彼等が山師だといわれても仕方がない。そういう議論が行われているが、それは教育学部の研究論題について見方が浅いからである。私は大学教育の教授が何をするかを明かにする前、この論題について弁明する必要がある。

二

十九世紀を通じて教育学部が教授法に殆んど関心を向けて来たことは事実であるが、しかし大分以前にそうではなくなつた。スタンフォード大学教育学部の三十三人の教授の中、教授法の科目を担当しているのは僅か九人に過ぎない。この科目を教えない二十四人の教授は主に他の三つの企画、即ち第一には児童、青年の行動及び特にその成長と学習との研究、第二に教育機関の運営上の諸問題の分析、第三に教育上問題となるいろいろな理念の批評等に従事している。これら科目の分科の一つ一つが専門家を必要とし、教育が例えば化学と同じように専門化して来た。化学者は最早単なる化学者ではなく、その代り生物化学者であり、有機化学者であり、物理化学者等である。教育においても亦同じで、教育史家、教育哲学者、教育心理学者、教育社会学者、教育統計学者もあればまた学校行政、初等教育、中等教育、さては大学教育に専心する専門家もある。教授法の問題は相変らずわれわれ同僚の若干の人々にとつて主たる関心事であらうが、他の目立つた問題の多くがおもにわれわれの注目をひいている。

例えば最近公立学校及び教師達の夥しい不認可は教授法には関りはない。その代りこれらの批評は学校は何を教えたらよいかとか、学校はどういう風に組織されたらよいかとか、学校を誰が管理したらよいかという問題に関している。これらの問題が起つて来たのは学校の失敗からではなく、その成功のためであると信じている人もある。これは少くともわが国の指導的哲学者の一人で偶々教育学者ではないがニューヨーク大

学大学院哲学心理学科シドニー・フック科長の意見である。公立学校の批評はその業績を考慮に入れてのみ極めてうまくなされうるとフック教授はいう。彼はこれを次のように簡条書きにしている。

1、アメリカの学校及び教育制度は色々な国籍をもつた異る民族的集団から統一した民主主義国家をつくる第一の機関である。

2、アメリカの教育制度は幾万の人々が社会生活を向上させるための教育的手段を与えて来た。

3、……それは宗教的信仰の大きな葛藤の中にあつて常に中立であつた。

4、それは人間社会の全史の中において階級のない学校制度を殆んど達成して来た。道義的にはすばらしい成功である。教育的には驚くべき困難と理論的混乱とを招いて来た。

フック教授は最後の文中で教育学者の主要な職能、即ち教育における「驚くべき困難と理論的混乱」との対策を講じようとする仕事につき言及した。これらの多くは、大げさにいうと、アメリカ生活そのものの中にある葛藤、換言するとわれわれが民主主義国民である限り存続する葛藤に由来している。本学のガラード教授も「教育はわれわれの民主主義の礎石」(6) であると書いている。それで特種な関心をもつ人々はそれを自由にせなくとも何とか左右しようと絶えず求めている。だから教育学者達はあらゆる方面から攻撃され続けている。攻撃の止むのは、最近のハーパー雑誌のある筆者の表現を借ると、アメリカ人が教育をわれわれの社会の「マトリックス」のように可愛がるのを止めるようになつた時だけであらう。

三

教育学者の真に大きな眼目は初等及び中等教育に関与することであるが、しかし一八九三年クラーク大学のG・スタンレー・ホール学長が初めて大学教育の課程を設け一九一〇年まで毎年教えた。(15.2) 彼はクラーク大学年鑑に次のように書いている。

大学教育――大学の研究、専門教育、法学医学及神学教育、わが国を含む各国における最も進歩した教育の現状と見透しとを含む。

一九一〇年にホールは課程を彼の同僚エドムンド・C・サンフォードにゆずつたが、彼もまたカレッヂの学長で一九二四年その没するまで連続して教えていた。その間に他の課程がシカゴ大学とジョンズ・ホプキンス大学で設置された。前者ははやく廃止になつたが、後者は哲学者から教育学者にかわつたエドワード・F・ブュークナーによつて教えられて、彼の没する一五二九年まで続いた。(15.3)

スタンフォード大学における大学教育の課程は、ワルター・クロスビー・イールスが初めて彼の課程を「ジュニア・カレッヂ」("The Junior College") と名附けた一九二八年に始つた。まもなく大学 (college and university)、行政、カリキュラム問題、学生の福祉増進及びその他の論題を取扱う他の課程が出来た。ほとんど同時に同じ様な課程がコロンビア、シカゴ、オハイオ州立、ミネソタ及びニューヨーク大学に設けられた。(5.4) 現在約二〇の大学がこのような課程を設けているが、それを教える教授の約一〇人は専ら大学教育が専門である。そのうち少くとも五人はもと大学長であつた人々である。

大学教育教授達の協会はまだ組織されていないが、また私の反対者達の活動も寡聞ながら知らない。だから必然的に本論を、私の教えている課程及び博士課程中の学生を指導している研究の種類とに留めて置く。

第一の課程は「アメリカ大学教育序論」という題名をつけてある。これはアメリカ大学教育として知られている手広く複雑で多角的な混乱状態について述べる。まづ大学教育機関が学校とどういう風に、また何故異つているか、及びアメリカの大学がヨーロッパの大学とどういう風に、また何故異つているかの分析より始める。ヨーロッパで二十六以上大学のある国はない。ところがアメリカでは二百三十三の機関が自ら大学と称している。加うるに教養大学 (liberal arts college) が約七百、師範大学が二百、ジュニア・カレッヂが五百、色々な単科の職業学校等を併せると殆んど千九百の学校がある。これらのうち千四百に近くが称号学位 (degrees) を授与するが、八百五十即ち六〇パーセントが認可されているだけである。偶々二百三十の所謂大学のうち約五十は未だ認可が得られていない。事実アメリカ合衆国教育省は僅か百三十一だけを大学と認め、またアメリカ大学協会の会員も三十五校だけである。

多くの人々は大学 (university) を哲学博士やそういった学位を授与する機関だときめているが、学位を授与する百五十二の機関のうち四〇は自らユニヴァーシティ (university) という名をつけていない。これらのうちには、カリフォルニア工業大学、カーネギー工業大学、マサチュセッツ工業大学、ペンシルバニア州立大学、ミシガン州立大学及びブライン・モーア、ラドクリフ、スミスの三女子大学がある。例えばM・I・T (訳者註マサチュセッツ工業大学) は年々スタンフォ

ード大学と殆んど同じ程の博士をつくっているし、ペンシルバニア州立大学は昨年ペンシルバニア大学より沢山の博士号を与えている。しかしながら年々与えられる八千三百以上の博士号（医学博士を除く）のうち五十パーセント以上を十二の機関が与えており、二十五の機関が全体の四分の三を授与している。スタンフォードは二十五校の中第十六位にくらいし、昨年は全博士号の約二パーセントを授けている。最も沢山博士号を与えるコロンビア大学で七パーセントを若干上廻る程度である。(13)

ヨーロッパ人はわが国の一流大学を尊敬しているが、彼等の多くはわが国においてユニヴァーシティという名前を無差別に使っているのを、他のいづれの国でもそれらしいものの見当らない教養大学やジュニア・カレッヂの存在と共に、どういう事情によるのか了解に苦しむらしい。なお彼等は夥しい数にのぼる全く無教育とまでいわないが、半教育の人々にわれわれがパチェラーやマスター、更にドクターの学位まで与えているのを嘲笑している。彼等にもまた多くのアメリカ人にもわれわれの大学教育が無意味な程揮沌としており、更にその大多数が軽蔑にすら値する程低級なものゝようにみえる。私はこの序説的課程においてこれらの批判を探究して正しい観方を与えようと試み、プラトー及びアリストテレス時代よりの大学の学問と大学教育の歴史を回顧し、西欧世界とアメリカ生活とにおいてどんな力が現在の大学にさまざまの形態を与えたかを調べ、その緊急の問題を分析し、更に進んでアメリカ大学教育企業と国民生活におけるその地位について総括的な概観を探求する。

私がこの課程を教えた最初の数年間はわが国の大学の将来について悲観論を吐露したが、他国の大学を学ぶにつれて、わが国の大学について益々楽観的になってきた。われわれを悩ましている多くの問題、例えば直ぐ後で論ずる大学の学問と大学教育との衝突などにも拘らず、私は確信をもって将来を期待する。だからこの課程ではアメリカ大学の長所とみられる諸点を挙げて所見を述べる。特に次の九つを強調する。

1、特に一般教養学部（undergraduate faculty of arts and sciences）における教養学の綜合、こういう種類のものは他のいづれの国にもない。

2、未だヨーロッパでは完成されておらず、殊にフランスに欠けている程度まで進んだ、基礎研究と応用研究との協調。

3、われわれの大学とアメリカ国民との親密さ、これは多くの問題を醸し出したが、真にわが国の統一に貢献し、またわが大学教育機関を知識人振った根性を嫌う人々によってつぶされるのを防いできた。

4、理事会の存在。その構成員は大学教育について有識でなければならないのに、往々にしてその見識を欠いていることがあるが、兎も角若干の例外を除いて学問の自由（academic freedom）を維持し擁護して来たし、更に他国の多くの大学をして社会の直接的な問題から比較的遠ざからせてしまった革命主義実践を駆逐するに尽力して来た。

5、大学々長に与えられた指導者たるの権力。アメリカの大学教育は特にこの点で発展して来たようにおもわれる。というのは十九世紀の後半四十年間に信じられない程の大人物が沢山大学長にあらわれて、当時のアメリカ社会に成熟して来た諸力を理解する洞察力と操縦する能力とをもっていたからである。

6、嘗ては問題とされなかったが、大学環境に培われて大学自身のみならず、わが国民生活に貴重な貢献をして来たような学科目（例えば農業、商業、工学、保育など）を、われわれの大学が喜んで受入れたこと。

7、わが校友の忠誠と寛大な行為。校友の中には兎や角批評される程やんちや坊主もいないし、年々母校に幾百万ドルを寄附したり、またいろいろな方法でその発展に努力している。

8、一般大衆の関心と寛大な行為の数々。彼等のなす大学への寄附はヨーロッパ人達を驚かしている。おそらく彼等はいかなる他の配慮以上にアメリカ大学教育の基礎をつくる諸活動にたづさわって来たのである。

9、公立大学と私立大学との絶えざる然も有効な競争、事実これこそ両者に有益な成果を増長させて来たのである。

以上挙げた長所とおもわれる九つの点のうち二三の正当さについては同意しない人がおそらく若干あるだらうが、わが国の大学がわが国文化の枢軸機関となって来たことについては万人が同意するに違いないと私はおもう。兎も角二つの明瞭な理由で大学はアメリカ生活の鍵となるような重要さをもっている。第一に大学は殆んどすべての他機関の指導者の大部分を教育訓練しているし、第二に大学は絶えず新しい知識を指導者の利用するよう創造している。事実上大学はこの国の大多数の高等教育をうけた人的資源と豊富な知識力とを生産している有力な発電所である。（未完）

（飜訳文責　羽野堅二）

学内報

四學部長改選

四学部長の改選は、去る九月中旬四学部教授会においてそれぞれ選出され、十月一日付にて任命された。

法学部長　福島　四郎教授
文学部長　三木　治教授
経済学部長　三谷　友吉教授
商学部長　板橋　菊松教授

なお学部長代理には、池垣定太郎(法)、壷井義正(文)、澤村栄治(経)、植野郁太(商)各教授が夫々選ばれた。

新學部長略歴

福島四郎法學部長

京大法卒、谷大専門部、京都府立女専同大専門学校及本学講師歴任、法学部教授、大学院兼務

三木　治文學部長

京大仏文卒、本学講師、予科教授、文学部教授

三谷友吉經濟學部長

東北大法文卒、関学高商部及商経学部講師、本学講師、経済学部教授、大学院兼務、経済学博士

板橋菊松商學部長

早大政経卒、京城高商、法政大、東洋大、立教大、日本大講師歴任、三重短大教授、本学商学部教授、大学院兼務経済学博士

高木教授　ドイツ、イギリスへ

経済学部高木秀玄教授は昭和二十八年度在外学術研究員として統計学研究のため、九月十八日午後零時半大阪駅発「はと」号で出発、同二十日羽田空港より一路ドイツへ向つた。

(大阪駅頭にて)

一ケ年の予定でロンドン大学において研究を続けるほか、ドイツ、フランス、スイス、イタリー等の各大学を歴訪する。

中谷教授歸學

法学部中谷敬壽教授は、本年四月在外視察研究員として法理学及び公法法理研究と実情調査のため、ドイツ、イギリス等諸外国の大学で研究し、六ケ月振で十月二十日午後四時半神戸入港の熱田丸で帰朝した。

人事異動

昭和二十九年九月三十日付

任期満了につき法学部長を解く　教授　明石三郎
任期満了につき法学部長代理を解く　教授　櫻田誉
任期満了につき文学部長を解く　教授　上道直夫
任期満了につき文学部長代理を解く　教授　壷井義正
任期満了につき経済学部長を解く　教授　中川庸太郎
任期満了につき経済学部長代理を解く　教授　澤村栄治
任期満了につき商学部長を解く　教授　板橋菊松
任期満了につき商学部長代理を解く　教授　植野郁太

昭和二十九年十月一日付

法学部長に補する　教授　福島四郎
法学部長代理に補する　教授　池垣定太郎
文学部長に補する　教授　三木治
文学部長代理に補する　教授　壷井義正
経済学部長に補する　教授　三谷友吉
経済学部長代理に補する　教授　澤村栄治
商学部長に補する　教授　板橋菊松
商学部長代理に補する　教授　植野郁太

昭和二十九年九月三十日付

大学院法学研究科幹事を解く　教授　植田重正

昭和二十九年十月一日付

大学院法学研究科幹事に補する　教授　池田榮

昭和二十九年十月一日付

本大学文学部専任講師に任ずる　本庄良邦

學会出張

◇文学部教授澤潟久孝教授は九月二十三日から二十八日まで高岡市の万葉学会に出席

◇文学部助手田中英三助手は九月十一日から十五日まで早稲田大学で行われた日本宗教学会に出席

◇経済学部教授鍔方貞亮教授は九月二十六日滋賀大学で行われた社会経済史学会に出席

◇経済学部東井正美、商学部相尾昌哉両講師は九月八日から十二日まで高知女子大学で行われた関西農業経済学会に出席

休学者の状況

平井三朗

昭和二十九年前期のうち七月末現在を以て二部学生の休学状況を調査した処、別表のような結果が出て来た。昭和二十八年度に対して今年度七月末現在で七二%の休学者を出している。この休学者の休学事由を大体次のように大別して見た。

病気に依る者　全休学者の五〇%以上を占め而もその大半が結核患者であるのみならず、早や一年次生から五名の患者を出している。入学後間もなく結核患者を出すと云うことは或は防ぎ得ないことかも知れないが、入学試験当時に、もう少し考慮の余地対策の必要があるのではあるまいか。

経済的事由に依る者は昨年度と同様法文の両学部が経商両学部より多くなつている。経商と云つても商学部には昨年度は皆無今年は一名を数えるに過ぎず殆んど経済学部の学生であることは何か原因がありそうな気もする。

勤務の都合を事由とする者、これは二部学生のみの特殊事由の一であるが、勤務の都合（転勤のためが殆んど）に依る休学者が今年はぐんぐんと増えて来ている。早や昨年の七〇%増となつている、これはデフレ政策の一現象と云ふか昨年よりはずつと世智辛くなつたために最早や転勤命令を拒み得なくなつたのではないかと思われる。何れにせよこの数字はもつと増加しそうである。

休学者の総数（二十八年度）を在籍全学生に対比すると三%弱の誠に微々たるものではあるが、休学者の心情を個々に検討すれば実に深刻なものがあり、或は病と闘い或は職業と取組んで営々として尚ほ学業を捨てず明日に生きようとする姿を想望する時、一掬の同情なきを得ない。別表の「休学者の行方え」に現われた様に休学者の半数が退学及び死亡者となつて可惜春秋に富む身を持ちながら我が学園から消え去つて行くことは誠に悲しいことであり、また休学者の行手は決してなまやさしい道ではないことに同情の念を禁じ得ない。（二部教務課長）

二部學生　昭和二十九年休學狀況調査（29年7月末現在）

学部別	年次別 ＼ 休学事由 年度別	病気 肺結核 29年	病気 肺結核 28年度	病気 其他 29年	病気 其他 28年度	経済的事由 29年	経済的事由 28年度	勤務の都合 29年	勤務の都合 28年度	他の事由 29年	他の事由 28年度
法学部	一年次	5	5	0	0	0	1	1	3	0	0
	二年次	7	6	0	1	3	1	1	1	0	0
	三年次	1	13	0	0	1	7	4	0	0	0
	四年次	6	5	0	2	6	3	1	1	0	0
	計	19	29	0	3	10	12	7	5	0	0
文学部	一年次	0	2	0	1	0	2	0	1	0	0
	二年次	1	2	2	0	2	0	1	1	0	0
	三年次	1	2	0	1	2	3	2	0	0	0
	四年次	1	0	3	2	2	3	1	1	0	1
	計	3	6	5	4	6	8	4	3	0	1
経済学部	一年次	0	3	1	1	0	6	1	0	0	0
	二年次	2	5	1	1	4	3	4	0	0	0
	三年次	0	1	1	2	1	6	1	2	0	0
	四年次	2	3	1	1	1	0	0	0	0	0
	計	4	12	4	5	6	15	6	2	0	0
商学部	一年次	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1
	二年次	2	5	0	0	0	0	0	0	0	0
	三年次	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0
	四年次	1	2	1	1	1	0	0	0	0	0
	計	4	8	4	2	1	0	0	0	0	1
合計		30	55	13	14	23	35	17	10	0	2

28年度休学者総数　116名　　29年7月現在休学者数　83名

昭和28年度休學者の行方え

学部別 ＼ 手続種別	28年度休学者数	29年度に復学者数	29年度に再休学者	退学及び死亡者数
法学部	49	21	12	16
文学部	22	7	0	15
経済学部	34	6	9	19
商学部	11	5	2	4
計	116	39	23	54

夏期調査研究報告

熊野路山村の實態調査

夏の休暇を利用して千里山法律学会が各地の実体調査を行うようになつてから四年目になるが今年は熊野路（和歌山県西牟婁郡）を選んだ。調査の結果については例年の報告書が出されるので私は隋行の感想程度にとゞめるが本年は特に和歌山県教育委員長から理解ある援助を得たこと朝日、毎日田辺通信部及び紀伊民報が関心を寄せられたことに感謝を表したい。

熊野路の山村を選んだことにはいろいろな理由があるが、この地方には源平の末孫と称せられる家があり、末子相続の形態が見られること、新法下の法意識等調査は多種にわたり、参加学生二十八名それに経済学部の東井専任講師、大学院博士課程の沢田君らの参加を得て学生は連日炎天の山間を徒歩して熱心に調査に当つたので村民からも理解を示され別れを惜まれた程で宿舎その他について四村の西村長はじめ区長、青年団の方々にも御礼を申上げねばならない。

実体調査に当つて常に感ずることは一つの法律慣行の如きものもその背景となる社会経済生活によつて支配され、それに適合する生活の法として現れるものであるから綜合調査が望ましい。

一、隠居、三居

この地方では長男に嫁をとると親は次男以下を伴つて隠居する。普通に隠居といへば生活の第一線から退くことであるが、この地方では親が別に働くために別居することである。次で次男に嫁を迎えると三男以下を伴つて別居する。これを「三居」と称し稀には「四居」の例もあるといはれるが、他家へ養子などに入るので実例には当らなかつたようである。

親が隠居、三居をする理由は山村では一般に早婚であるから規模の小さな家屋に親子夫婦が同居することは不適当であることの外に次男、三男に独立生活ができるまで（末子に嫁をとるまで）働くことが親の責任であるとする考え方が強く、従て末子に生活の基礎ができると、その後は親が末子の家に暮すか長子と同居するかは自由で極端な例では父母の位牌が別々に祭られているなどのことがあつた。

二、末子相続

隠居、三居と末子相続との関係について調査は最も困難な点で、調査のしかたによつては長子相続とも末子相続とも断定できる。昨年の和歌山市雑賀崎の実体調査では長男が結婚すると親の家を出る漁村の末子相続として原則的形態と言われるものが明かに見られたが熊野路における隠居、三居と相続の関係は複雑である。

相続形態としては隠居、三居に際し祖先の祭祀と親の財産は誰が承継するかと最後に親の死跡を誰が承継するかの問題である。祭祀の承継も前述の如く長男の家で行われるとは限らず親が末子の家に居た場合には末子がその承継者となり一定しない。

財産については親が長男を残して家を出るので家屋敷は長男子相続である。田畑等は三反百姓といはれ農地の狭いこと生活の中心は山稼ぎであるから親は良田や耕作に便利なところを選ぶことになるといはれるが実例中には長男には家屋敷だけ与えるものがあり、反対に全財産を長男に残して別居するものがあるが、それらはいづれも山稼ぎという特殊な生活に結び付けられる。

たゞ一般に理解されていることは惣領に六分若くは七分を与えるものとする考え方が強いことで西鶴などが江戸時代の町人相続に「所務わけの大法」として同様な分配率を示していることゝ偶然一致する。

長男の結婚によつて親が家を出るために行われる末子相続は長子相続制への中間的形態と言はれているが、江戸時代庶民相続法が必ずしも長子相続制ではなかつたことゝ比べてこの形態が中間的形態であるか否かについては疑問の余地があるように思う。

戸籍簿上では末子相続の形は見られないのが当然であるが親が隠居して分家した末子の家族となつている実例が見られた。

三、丑年生れの本家相続

本家、分家、隠居、いづれのうちでも丑年生れの男子があると、その子は本家を相続するものと信じられている。調査中に丑年生れの幼児がある家の老母が孫の本家相続を信じている例があり、関係者の意見をきいてみると、それを信じている。

丑年生れの子は何故本家を相続するかの理由についてはさまざまで牛の如く頑健にということも理由のようだが、むしろ牛は執念深いからうらむところのない本家に入れておかないと本家をうらむというのである。

このような迷信的民俗が支配する相続は超法律的でその民俗に一致させるための手続がとられるものゝようで迷信的慣行が優先する結果となる。

四、源平の末流と系譜

この地方には源氏、平家の末流といはれる家がかなり多く、山間の平家村といはれるところには馬場の跡があり、一軒家に平家追捕の勲功状をもつた源氏の末流を称する家があり、桓武、清和何代の孫などゝ家の系譜を保存しているものもある。源平の戦乱史と地理的な理由を考へると一応理由のつく地方とも考へられるが、全国的に散在する平家村についてその成立に疑問がもたれているように保存されている系図などによつて速断することはできない。

山間に安徳天皇の墓と傳へられるとこ

（貸切バスにて熊野路へ）

島根大學 関西大學 共同 第一回陰岐綜合文化調査

一、組織

陰岐に対しては従来よりかなり調査された面もあるが綜合的な調査がなかつたので、西洋史の原弘二郎教授が島根大学から転任して来られたことが契機となつて、両大学の共同調査が具体化して、今年の七月一応企劃が纏つたのでわれわれは理事会、文学部教授会の承認を得てその第一回の調査に八月十日から十八日に亘る間の一週間、調査班を編成して現地に向かつた。

今年より着手して三・四年間を継続し、各部の担当者が研究を進める予定で、今年は左の通り編成された。

島根大学

文理学部長（調査団長）原田虎雄教授
総務　今　石教授
歴史学　友　田教授　社会学　山　岡教授
国語学　広　戸教授　地理学　草　光教授
地　学　山　口教授　生物学　斎　藤教授
考古学　山　本教授

関西大学

文学部長（副団長）上道教授
総務　原　教授
歴史学　魚　澄教授　社会学　井　上教授
民俗学　高　橋教授　国語学　吉　永教授
考古学　末　永教授

以上の外専門分野をもつて、事務教務の都合で明年より参加される方がある。

二、第一回調査　八月十一日—十六日

今年は調査の第一段階の予備調査として考古学と民俗学が先遣され、島根大学からは団長原田教授、考古学山本教授、関西大学は民俗学高橋教授、考古学は末永、他に大学院学生亥野彊、中浦茂雄、学部学生森田哲夫、勝部明夫—何れも史学科—の四君と特に見学として関西学院大学学生糸賀達典君が同行した。

「八月十日朝」—大阪駅発山陰線で島根県境港に向かつた。夜十一時全員の集結を終つて陰岐連絡の第二陰岐丸に乗船。この会社の社長中川秀政氏の好意で、先ず乗船における便宜が与えられた。翌朝八時西郷港に到着。県教育委員会、陰岐高等学校の諸氏と高梨旅館に入り、陰岐調査の第一歩に入る。学生達は高宮旅館に宿泊することとなり、午後より調査の準備に移る。

「八月十一日午後」—西郷町には有名な飯ノ山の横穴古墳があり、附近には石器時代の遺跡が、点々と分布し、黒曜石の石屑の散布が多く、早くより島根大学の山本教授が注意されていた。今回の計劃にもすでに挙げられてあつて、午後は先ず飯ノ山の横穴を調査した。

飯ノ山は全体が硅藻土の採取地となり、かつて多数にあつた横穴は悉く破壊され、わずかに壁画のある横穴のみが保存されてあるに過ぎない。岩波の写真文庫にある飯ノ山横穴の殆どは消滅して仕舞つた。

現在では横穴の玄室部のみが辛じて残された程度であるので、もとより横穴古墳としての完全な形式は見られない。壁画も損傷が多く、年々その度を増して来る様である。

画は線刻で盾、人物と思われるもの、幾何学的な表現等がある。もちろんその絵は稚拙で、どんな人が、何を意味して描いたか、これを考へるといろいろな聯想がつぎつぎと派生する。

室内は何等の資料となるものを残さない。早くにこの横穴を調べた人の話では土器などもあつた様であるが、現在では全く判らない。

たゞこの横穴の壁画に相対したものとして、河内の高井田の横穴古墳の壁画外二・三があるので、つねに日本原始絵画の代表として、美術史上知られているものである。私の関心も実はこの飯ノ山と、高井田の壁画の描写、表現の意図、乃至は描法等についての比較検討にあるが、現在ではあまり明確な観察をどちらについても与へることが出来ない。

この横穴はいろいろ問題を提起するだけに学生にはまことによい見学になつた。実習を兼ねて壁画の拓影をとり、いつの時代にかこの横穴を掘鑿したときの、器具の刄迹が無数に残るものの拓影もとつた。刄の幅二寸前後の遺鉋か鑿の様な器具らしい。器具の形式についても、種々考へるべき点が多い。

ろがある。しばしば研究されつゝ資料がないために断定し難いことになつているようだが、代々その墓石に近づくためには必ず裸足になることが守られてきたという。平家物語、源平盛衰記に悲劇の安徳天皇はその生存と女帝説が傳へられ、太田錦城、兼葭堂なども疑問とし太田南畝の如き墓所は七ケ所も数へているので更に一ケ所を加へても異とするに足らない。

源平の末流を称する家の墓石には古く苗字が記入されている。これらの家の系譜にも稀に「為家督末子」などゝ記入されている例があるが、これらの家には末子相続の形態は見られず、調査に対しても否定する回答となつている。

検断と称せられる家があり昔は「決断所」と言つていたといふが本宮所領の内二ケ村を預つていたことがその家の所藏文書に記されていた。

五、明治五年の人身戸籍

徳川時代の宗門人別帳から明治になつて初めて作製された明治五年の戸籍簿で人身戸籍といはれているものが四村役場に保存されている。所属寺院、神社、藏業などまで記入されているが俗に刑罰に処せられると「戸籍が汚れる」と言はれてきたが、人身戸籍には刑罰に処せられたことが朱書されている。不具廃疾のことまで記入されているが「阿呆」などゝ記入の例がある。現存する人身戸籍としては珍しいものであろう。

六、法意識と民俗

結婚後数年を経て子供まであるのに親の反対する結婚であつたため結婚届ができないと言つているところがあり、調査に当つた学生は驚いて新民法の婚姻届を説明して喜ばれたと言つていた。

民俗的法意識は指導者によつて改められる実例として、この地方でも双方の長幼について後に生れた子を兄とする民俗的理解であつたが、出生届の際民法上の出生論によつて戸籍係で注意したために法律的理解が修正されつゝあるということである。

（理事　春原源太郎記）

室の広さは、大体方形で、幅長さ天井の高さは六尺前後で彎隆形をなしている。その構造は高井田古墳と共通する点もあるが、一致するところは少い。これらのことも將来比較検討が必要である。

「八月十二日午前」玉若酢神社附近社頭に樹齢二千年の老杉と、宮司憶岐家に駅鈴を伝えることで知られている。社地附近には古墳が二三、規模は小さいがその一は前方後円かと山本教授が云われる。玉若酢の神の鎮座と、思い合せば首肯けるものもある。

神社の前の台地が国府原で、こゝにも古墳があるが、一帯に黒耀石の石屑が散布し、神社にはすでに石斧が採集せられてあつた。古代人の住居に適した場所であり、陰岐国でも早くに開けて、文化的中心をなしたと考えられる。玉若酢神社の鎮座も、古墳も憶岐氏が国造以来の家系を持つと云う伝来も、国府県の傍らに「国府井戸」と称する井があつて、現在なお附近の人々の生産を潤していることもすべてそうした環境に基ずくことであり、陰岐国分寺趾が、すぐこの東に続いて残るものもまた同じ意味に立つものであろう。

「午後」東郷村神米宮尾遺跡、宮尾遺跡の現状は、かつての住居のあつたと思われる個所は地形が変化し、遺物は海岸の汀線に、或は海辺の砂浜に散布している由を、この遺跡の研究者藤田一枝氏が語られた。われわれ現地について見たけれども、特に拠るべき資料を検出するまでには至らなかつたが、藤田氏の蒐集資料は縄紋式、石器等の莫大な量に達するものがある。

縄紋式土器のうち爪形縄紋系の資料が多く、他のものにも將来山陰地方の縄紋式土器が明かにされる時期の来たときに、本土と陰岐との石器時代の文化を考へさせるに役立つことが多い。現在軽卒な判定は控へて置かねばならないが、これらの土器石器の文化は本土より波及して来たものと考えるべきであり、朝鮮との文化関係は原始時代においては、どの程度までこれを認識しうるかが、私たちの大きな関心事である。

「八月十三日午前」西郷発五箇村に向ふ。水若酢神社に参拝。古墳調査、山本教授の調査されたもの、横穴石室にして天井石を除去された、奥室には石柱がある由なるもいま埋没。神社の本殿の背後に古墳と見られる円丘がある。社殿建築の為に一部が削り取られている。しかし古墳としての外部的徴証が明かでない。

「午後」苗代田附近の古墳調査。横穴と小円墳散在。重栖逞三郎氏宅の裏で、土取工事中、須恵器と土師器出土。遺跡は古墳でなく一種の包含層の様であるが、土器出土の上方に一個の円墳がある。丘陵の稜線に沿つて小円墳が點在する。

五箇中学校の背後の丘陵上に古墳があつて運動場拡張の為に破壊され土器類が出土したと云ふが、いまは全く痕迹さへ留めない。学校に石斧、土器の別な場所から出土の遺物をも保存している。

この夜辰水川旅館に宿泊する。盆踊りがあるので学生は高橋教授と見学。

「八月十四日午前」五箇村北方の横穴を調査。二十数個が一群となつて埋もれていると云ふ。そのうちの一個のみ開口、簡単な測図と写真を撮り、後の調査に備へる。

「午後」野外の気温三十五度半日を休養夜九時陰岐丸乗船島前に向い十一時過菱浦に到着。十二時前常盤旅館に入る。

「八月十五日」海土村郡山遺跡を経て海土村役場、後鳥羽上皇御火葬所。陰岐神社村上助九郎氏邸。田邑二枝氏蒐集品を調査。郡山遺跡は縄紋式を主とし、石器がかなりあり、現地はもはや遺物を検出し得ないまでは田邑氏が採集され、少量の黒耀石破片を見るに過ぎない。

「八月十六日午前」焼火山に行き宮司松浦氏蒐集品を見、遺物による地理的分布を調査。

「午後」美田湾に上陸、笠置文書を拝見の後立志の横穴式石室と思われる古墳を見る原形は明かでない。

別府で黒木御所伝説地に参り夕方菱浦に帰著。夜十一時乗船。松江に向ふ。

「八月十七日」朝。松江到着。島根大学原田文理学部長に迎へられる。こゝで学生は出雲大社へ見学に向い、われわれは関係諸方面へ御礼の為挨拶廻りをする。午後島根大学で新聞発表。高橋教授山口に出発。その他皆生にて宿泊。

「十八日」午前十一時乗車午後七時十四分大阪着、解散。

三、調査經過

以上概要を記した中で、明年の調査方針に対して必要な事項を録すると、

1、玉若酢神社と国府原附近の調査—黒耀石の石屑散布地、古墳。（試掘の予定）

2、宮尾遺跡と藤田氏蒐集品に対する精細な調査と遺跡の分布

3、国分寺跡附近の古瓦出土地。（現状調査）

4、五箇村苗代田附近の古墳。

5、五箇村北方の横穴群（清掃）

6、田邑氏、松浦氏蒐集品の調査と遺跡の分布

等が特に注意される。

明年もなお予備調査の段階であるが、以上の諸遺跡、遺物の状態とを、明年はにらみ合せて、調査を進める必要がある。

小なりといえども、古来より一国を形成し来つた陰岐国であるから、一応の踏査だけでも簡単にゆくわけはない。上記の諸遺跡の個々についての発掘調査を企劃すれば、かなり努力を要することでもある。われわれは強靱な粘りをもつてこの研究に対処する必要を感じる。

しかしそれだけに、従来断片的な研究に止まつた、陰岐国の文化調査が綜合の形をとつて進められ、報告書が纒まれば役立つものがあると思われる。

民俗学方面の調査についてはいつか高橋教授の執筆があるから、こゝでは全体の経過を報ずるに止める。

補記

今年の調査は予備的な行動をとり、発掘実測等のことはなかつた。むしろなるべく広く行動することが目的であつた。

そして予定のすべてを終つた。これは実に島根大学の原田団長以下各員の周到なる計画と目的地への完全な連絡によるところである。

われわれは到るところで調査の便宜を得たのは一つに島根大学班の現地に立案された計画が、地元における好意ある受入と完全な融合となつて現われたものであり、参加の関西大学班員一同の深甚なる謝意を表すると共に、地元諸氏に対して厚く御礼を申上げる次第である。

明年以後の調査については、夫々の大学で検討の後、両者会議で企劃を進める予定である。

（文学部教授　末永雅雄記）

学生

関西六大學野球リーグ戦開幕

前半戦の山とみられた本学対同大戦は九月十、十一両日、西宮球場で、戦われたが絶対優勢を伝へられていたのにも拘はらず、連敗を喫し、以後の各試合に絶対破れることの出来ないピンチに追い込まれている。特に前期試験明けの対立大戦、最後の対関学戦は、絶対負けられない一戦となつた。今迄の戦績次の通り。

9月10日	関大	0	0	0	0	0	2	0	2
	同大	1	0	0	0	0	0	2	3

於西宮

9月11日	同大	5	3	0	0	4	0	0	0	0	2	12
	関大	0	1	0	0	0	2	0	0	2	0	5

於西宮

9月15日	関大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3
	京大	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	6

於西宮

9月16日	関大	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2
	京大	0	0	0	0	5	1	1	0	A	0	7

於西宮

9月20日	関大	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0
	神大	0	0	0	0	0	4	0	0	0	6	0

於西宮

9月21日	神大	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	3
	関大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

於西宮

9月22日	関大	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	神大	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	6

於西宮

陸上部　第七回秩父宮賜杯を受く

西日本学生陸上競技対抗選手権は九月十一、十二日神戸市民運動場で挙行されたが、斗將園田を中心として、トラックフィールド両競技の各種目に入賞、トラック50点。フィールド52点をあげ綜合得点102点で優勝し、秩父宮賜杯は四回連続して本学に留つた。

各部の動き

レスリング部　関西学生レスリング秋季リーグ戦、最終日は関大、関学の優勝争ひとなつたが、接戦の末5対4で関学を破り、春の雪辱を遂げた。

体操部　第八回全日本学生体操選手権大会、二部に優勝本学は団体規定及び個人規定に活躍し堂々優勝したが、来年度の活躍が今から期待されている。

拳斗部　全日本拳斗選手権出場資格獲得を賭けた関西アマチュアーボクシング選手権最終日二十六日午後六時、貝塚市公会堂で行はれたが本学から、次の三選手が出場権を獲得した。

ジュニヤーフライ級　鷲見(関大)棄権　佐藤(関学)
バンタアム級　稲葉(関大)判定　辻本(関学)
ライト・ウエルター級　尾白(関大)判定　長尾(近大)

關西大學 E・S・S

四月以来近畿地区多数の大学との交歓を通じて、堅い友情を造り上げた。E・S・Sは五月に神戸大学において開かれたが、全関西地区大学E・S・Sの討論会(Debating Contest)に於いては方四位の成績を上げ又E・S・S年中行事の夏期合宿練習も今年は信州で中、高等学校の課外英語指導を含めて無事終了。夏期休暇中から計画されていた大阪地区四年制大学E・S・Sの連盟結成の具体的な案も一応形がつき、九月十九日(日)関西大学大学院円形教室及びホールにて多数の来賓、顧問等、一方新聞、放送連の絶大なる援助の下に本E・S・S部長、英三、上道功君の司会でその結成会を終つた。

結成会のプログラム次の通り

開会之辞　大阪商大E・S・S　森田　泰雄氏
祝　辞　関西大学々長　岩崎　卯一氏
英国総領事　ラツセル・グリーンウラド氏
米国総領事　リチヤード・ピーター氏
米国文化センター館長　マービン・ハイワース氏
大阪商大教授　谷岡　昇氏
近畿観光株式会社々長　茨木　基成氏
関西大学E・S・S顧問　水谷　換氏
大阪府知事　大阪市長　大阪教育委員長
朝日、毎日、日本タイムズ、大阪日日産業経済、読売各新聞社
朝日、新日本各放送局
大阪市大E・S・S
閉会之辞

千里山法研部

関西学生法律連盟は九月二十二日、本学法文学部二教室で行はれ本学植田重正教授出題、刑法(共犯)に就いて各大学の論争があつたが、審査員山崎(高裁判事)竹田(近大教授)植田(本学教授)秋山(同大教授)四氏の審査の結果

一位　近大　松井君
二位　関大　岡君
三位　京大　井嶋君

と決定、その後の質問賞五名の中、本学からは小野山、宮崎両君が入賞した。

放送研究会　九月十八日放送部創立一週年の記念祭を、大阪、そごう百貨店七階催場で強行開催した。台風の警報が出ていたのにも拘はらず、観衆は続々とつめかけ、概ね六〇〇名が参集、成功の裡に終はることが出来た。当日主な参会者及プログラムは次の通りである。

来賓　朝日放送、吉田制作部長、学生放送連盟、関学一阿部長、本学関係としては岩崎学長山田学生部長等の来臨を得た。

プログラムは

1、関西大学グリークラブ　大江司郎他二〇名
2、関西大学放送研究会　放送劇　山口邦夫他五名
3、関西学院大学放送劇　笠地蔵　一阿氏他十五名
4、関西大学放送研究会放送劇　ひよつとこ　山本英夫他六名
5、関西大学応援団ブラスバンド　島本隆行他二十名
6、映畫　関西大学、(記録映畫)　歴史は夜作られる　以上

九州各地に繰りひろげた

關西大學の夕

昨年初の試みとして四国各地を巡回して多大の成果を挙げた関西大學の夕は、本年九州各地に巡回して各校友支部との連絡、地方文化の啓蒙、本学の紹介に、岩崎学長を中心として各教授、学友会執行部、雄弁会、放送部、軽音楽部、映画研究部、新聞会、写真部の学友会各部の協力は多大の反響を呼び、盛況裏にその全日程を終了した。次にそのスケジュールを抄録しよう。（本誌才二七一号に既報の分もありますが再録します）

一、期　間　七月二十日より七月三十日

一、巡回地区　九州地方

一、開　催　地

福岡市（西日本新聞社講堂）、佐賀市（佐賀新聞会館）、長崎市（長崎東高校）、熊本市（太洋百貨店）、鹿児島市（公民館）宮崎市（教育会館）、大分市（教育会館）

一、人　員

岩崎学長、山田、矢口、植田、榎本松原各教授　鉄井、山村両職員

学生二十三名

一、講　演

民主主義の限界　学長　岩崎卯一

日本社会と西欧社会　教授　矢口孝次郎

法の見方について　教授　植田重正

ハムレットと幽霊　教授　榎本金次郎

デフレーションと長期経済計画　教授　松原藤由

挨拶　教授　山田松太郎

一、弁　論　雄弁会

一、映　画　大学の生活、マナスル北斉

一、軽音楽　ハワイアン、ブルートンフハイブの二バンドによる演奏

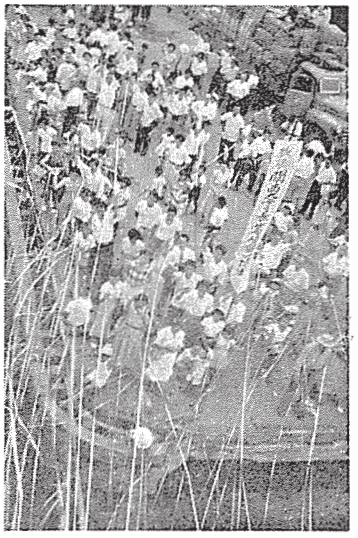
司会　執行部、放送部、雄弁会が分担

そのほか執行部による紙芝居、新聞会の百号記念新聞の配布及取材、写真部による記録撮影

以上のプログラムで各地に〃関西大学の夕〃を開催、各地の校友支部は勿論、在学生各県人会の学生諸君及各地新聞社の絶大なる後援を得て多大の成果を挙げることが出来た。

昨年の四国巡回にも増して本年は各地校友支部の方々が行事の前後を通じてたゆまざる協力を惜しまれなかつたことは関係者一同大いに感激したのであるが、此の行事を機会に急速に支部の結成を見たところや、今まで連絡のとれなかつた方々が次々と会場や宿舎に押しかけられて、支部の発展にいささか寄与出来たことは、大学のPR成果と共に我々関係者の大いに喜びとするところである。

（大分教育会館にて）



（別府埠頭にて）

九州巡回余聞

△S市の旅館の食事による食当りか教授以下十数名の下痢患者発生、N市での開催は不可能かと心配されたが、満員の会場を見た軽音楽部学生、演奏が終つて「腹に力が入つてよくなつた様ですもう大丈夫」。

△炎暑の中の強行日程に学生諸君の協力は見事その難事を克服、特に病人に対する友情や学生らしいエチケットの心得には感心させられた。

△此の種催物では成功のためしがないと云われているH市で、悲観的な学長もいざ会場に臨んで満員の盛況を前にして「ウーム」再認識されたものは？

△演奏が終つて熱狂した高校生にサインを求められたT君、はにかみながら「僕は学生ですから」と断つたが心の中では喜びの波が彼のドラムの様にとどろいていたとは……。

△K市では会場の子供を連れ出して屋上で紙芝居で二時間活躍したI君、K君「アルバイトでこの位集つて呉れると充分やつて行けるんだがナー」、物を売るとそうもゆくまい。

△K市、M市、B市と三日続けて夏祭りに出あわせて牛のひく「だし」みこしの渡船等各地の情緒を満喫出来てこれは役得か。

△N市の原爆中心地を見学して教授学生、その犠牲者の冥福を祈ると共に平和に対する感を深めること一汎。

△O市で二日間つききりで世話された校友のT氏最後は我々と一緒にゴロ寝、夜中に大きな声で「学歌第一節!!自然の秀麗人の親和」と歌ひ出して後はムニヤ〳〵。余程嬉しかつたに相違ない。

（Y・T生）

校友

常議員会

九月二十四日天六学舎校友課附属室に於て常議員会を開催、左記事項を附議、夫々可決した。

一、来春入会者の件
二、支部承認の件
三、校友名簿発刊の件
四、校友総会及代議員会開催の件

千里山昭八会

七月三十一日(土)午後四時より舞子寮に於て第二十八回例会を開催、当日は海水浴も目的としていたが生憎く曇天の涼しい日となり海水浴には少し不向きであった。デフレの波は月末と云う日に一層拍車をかけて参加者は予定より減少したが家族連れの人もあり中々賑やかな集りとなった、幹事より各経過報告をし更に母校七十周年記念拡充資金集めについて一層の協力方要望。御苦労ながら幹事は草鞋ばきで廻ってくれと云うことになり幹事たるも辛いかなである。

次の例会は京都組で計劃して貰うことに一決した。

明れば八月一日一片の雲もない快晴である。一同海に飛込んで海水で洗面だ、実に心地よし。朝食後は娯楽に欲談に時を過ごして正午過ぎ散会。

当日の出席者
浦野健二郎　一瀬　義次　中家　利国
大島　武夫　宮地　正一　中江　巽
多賀　恒一　広田　憲信　野田　文雄
瀬郷　清市　百石　義雄　広瀬　義臣
高橋　新吉　藤本順二郎　平井　三朗

長崎支部創立總会

待望の「関大の夕」開催の三日前七月二十日午後六時三十分より長崎市船津町農民会館に於て校友会長崎支部発会式を挙行、母校の事業計画等発展の為には積極的に協力すること、其他長崎支部の規約に関する事項等申合せて、懇談会に移り母校の目覚しい躍進振り或は学生時代の思出等語り合い和気靄々裡に散会。

役員
支部長　篠原　公生
副支部長　田浦　末広　田口　誠

当日出席者
青木　誠三　砂野　降　三宅　豊之
山本　武実　村上　芳治　森　泰人
田口　誠　土肥　良夫　田浦　末広
中路　暢一　竹村　早連　篠原　公生

千里山十期会

九月一日(水)午後六時より双葉に於て一水会例会を開催、地理的に不便の処へ雨のためか出席者もやゝ少かったが、などやかな空気にしたりつゝ秋季総会の打合せをして楽しき一と時を過した。

当日出席者
浅野　時男　江里口春志　河内　兼三
川澄　秋一　竹沢喜代治　森　知己
森下　善雄　矢野　文雄　柳田　栄治

友粋会總会

昭和十三年専門部二部商業学科卒業生を以て組織する本会は、其後会員相互の熱心な努力によって逐次連絡可能な者が殖えて現在約八十名に達したので夏季例会を九月十二日午前十一時より河内長野市「河鹿荘」にて開催。当日は台風来襲を予想されたにも拘らず在学中の思い出話、各々の現況、母校の近況を語り合い楽しい一日を過した。

尚次回の総会は十二月の予定、未連絡者は大阪市東区京橋、森田商店内関大友粋会事務所(電東七三二)へ連絡されたい。

世話係
城下　正行　島津　徳三

当日出席者
森田文一郎　並川　治郎　森本　勇
牧村　恵司　島津　徳三　安藤　博重
飽江　城夫　梅井　龍一　西沢　聡

大三会總会

大正三年専門部卒業者の同窓会大三会は本年で満四拾年に当るのでこれを記念し、七月二十四日午後一時から大阪西区靱上通一丁目近畿富山会館で総会を開催。母校久井専務理事より、大学の現況並に将来の計劃等詳細な説明があり、創立七拾周年拡充資金の寄附申込みを行い、最後に母校の偉大なる発展を祝し午後八時盛会裡に散会した。

当日出席者
井波　義吉　内田　政一　右田　忠吉
岡本　栄吉　萩野　義正　左古　信二
島　良司　杉本　治作　富田　貞男
松本芳太郎　三木甚太郎　渡辺　兵治

校友名簿発刊について

母校七十周年記念事業の一環として左記の通り昭和三十年用校友名簿の刊行を予定し、鋭意準備を進めております。

昭和二十八年用名簿発行後の校友各位の御異動(**現住所、職業又は勤務先**)等御気付の方はより良き名簿完成の為、御面倒乍ら左記宛御通知賜ります様御願い申上げます。

昭和二十九年十月十五日
大阪市大淀区長柄中通
関西大學校友會

記

一、規　格　B五判(学報型)
二、予定価格　金五百円也
三、収録人員　約二万七千人
四、内　容　氏名、出身府県、現住所、職業又は勤務先
五、発刊予定日　昭和三十年九月末

昭和二十九年十月十五日発行
関西大學學報　第二七三號
編集兼発行人　大阪市大淀区長柄中通二丁目一二番地　久井　忠雄
印刷所　大阪市北区川崎町三八　株式会社　ナニワ印刷所　電話堀川(七三〇二)(三一九三)番
発行所　大阪市大淀区長柄中通二丁目　関西大學學報局　電話堀川(35)一七五六番　振替大阪二六七七二番

感謝録

別項記載の通り、母校創立七十周年記念拡充資金寄附を募集致しました処、その趣旨に御賛同下さいまして陸続左記の通り御寄附をいたゞきました。九月三十一日迄に拝受しました御寄附者の芳名を爰に録し、謹んで感謝の意を表します。

昭和二十九年九月

学校法人　關西大學

關西大學七十周年記念拡充資金寄附者芳名（九）

昭和二十九年九月三十一日現在（順序不同、敬称略）

一、篤志家の部（才九回）

金壹百万円也　匿名氏
金壹百万円也　匿名氏
金壹百万円也　匿名氏
金參拾万円也　匿名氏
金壹千円也　寺嶋宗一郎
計　參百參拾万壹千円也
累計　金九百八拾壹万參千七百四円也

二、關係業者の部（才九回）

金壹万八千五百円也（才一・二回合計額）
ヘルメス通信工業株式会社
金壹万八千円也　美津濃株式会社
金壹千円也　株式会社山越製作所
計　金參万七千五百円也
累計　金六百九拾七万七千五百円也

三、校友の部

1. 地方支部

イ　大阪支部（才四回）

金七万円也　阿部　甚吉（昭7専法）
金五万円也　下条小野石衛門（才一・二回合計額）（明43専法）
金貳万円也　大月　伸（才一―三回合計額）（大6専法）
金壹万円也　岸本　芳夫（昭4専法）
金壹万円也　富永　竹夫（大2専法）
金五千円也　金田　雅一（臨16大経）
計　金拾六万五千円也
累計　金貳百拾六万七千円也

ロ　川辺支部（才五回）

金壹千円也　井上　精一（昭25学一経）
計　金壹千円也
累計　金貳拾參万壹千円也

ハ　明石支部（才一回）

金壹万円也　片山　元蔵（大11専法）
金五千円也　尾島登亀雄（大3専法）
金五千円也　寺島　熊市（大8専法）
金參千円也　岩崎　義雄（昭9大法）
金參千円也　平井　亮一（昭25学二文）
金參千円也　奥田　勝彦（昭13専二法）
金參千円也　真島　敏夫（昭25専法）
金壹千円也　赤松佐一郎（大13専法）
金壹千円也　中村　清成（大13専法）
金壹千円也　和田　鶴蔵（昭13専二法）
金壹千円也　河野　通豊（昭13大法）
金壹千円也　前田　昌富（昭26学一政）
金壹千円也　赤阪　健一（昭12大経）
金壹千円也　溝手　二二（大13大法）
金壹千円也　井本　哲明（昭29学法）
金壹千円也　林　秀雄（大14専法）
金壹千円也　鳴尾桑三郎（昭27学文）
金壹千円也　朝顔　和哉（昭28学法）
金壹千円也　琴地　勇（昭21大経）
金壹千円也　藤田　正美（昭19大商）
金壹千円也　大塚　幸雄（昭27学一商）
金壹千円也　福地　壽三（昭7専法）
計　金四万七千円也

ニ　関門支部（才一回）

金貳万円也　山路　岩雄（明38専法）
金壹万円也　岡本　勲治（明38専法）
金壹万円也　内田　重成（明22法）
計　金四万円也

ホ　呉支部（才一回）

金壹千円也　長尾　幸治（大6専法）
金壹千円也　水落　元一（昭9専商）
金壹千円也　坂井　護（昭10専一法）
金壹千円也　東　正実（昭11専二法）
金壹千円也　熊田　潔（昭15大法）
金壹千円也　下原　太郎（昭15大法）
金壹千円也　浅野　純一（昭16専二法）
金壹千円也　藤野　肇（昭16大経）
金壹千円也　上開地政夫（昭18専二商）
金壹千円也　野村　壽（昭23大法）
金壹千円也　山本　実（昭8専一商）
金壹千円也　松永　幸男（昭20大法）
金壹千円也　清水　篤夫（昭9専一法）
金壹千円也　山本　昌雄（昭18専一法）
金壹千円也　鈴木　剛（昭18専一法）
金壹千円也　厚井　陽道（昭19専一法）
計　金壹万六千円也
累計　金參百四拾參万五千円也

2. 職域会

十合関大会

金貳万円也　木原　繁実（昭11大経）
金五千円也　菅野　一夫（昭15大法）
金參千円也　大谷　盛弘（昭11大法）
金壹千円也　山崎　義夫（昭16専二経）
金壹千円也　岩木　鉄太郎（昭9専二法）
金壹千円也　近藤　公夫（昭22専一経）
金壹千円也　中村　長一（昭26学一経）
金壹千円也　魚谷　忠一（昭12専二法）
金壹千円也　加島　正美（昭27学一経）
金壹千円也　覚野　元道（昭27学一経）
金壹千円也　藤野　浩（昭27学一経）
金壹千円也　松井　雄二（昭27学一経）
金壹千円也　御興　壽三（昭27学二商）
金壹千円也　望月　義春（昭27学一経）
金壹千円也　渡辺　庚（昭16専二商）
金壹千円也　毛利　実（昭27学一経）
金壹千円也　井上　文德（昭19大経）
金壹千円也　忠次（昭28学一経）
計　金四万參千円也
累計　金參拾四万五千円也

3. 同期会

イ　昭八会（才二回）

金貳万円也　岡本　健吉
金五千円也　中村　重男
金五千円也　高橋　新吉
金參千円也　飯田　朝治
金參千円也　馬島　政太郎
金參千円也　東野　清太郎
金參千円也　伊藤　浅夫
金弐千円也　北藤　秀応
金弐千円也　池田　仙太郎
金弐千円也　山下　秀義
金弐千円也　前坂　健吉
金壹千円也　伊知地　一
金壹千円也　坂上　五良
金壹千円也　太田　幸一
計　金五万參千円也
累計　金五拾參万七千円也

ロ　昭七会（才四回）

金貳万円也　岩佐清三郎
計　金貳万円也
累計　金拾貳万八千円也

ハ　双龍会（昭和十四年・専門部卒）

金弐千円也　山崎孝三郎
金壹千円也　平田　光男

計　參千円也
累計　金五万四千円也

ニ　昭十一年卒　（才一回）

金貳万円也　木原　繁実
金壹万円也　澁川　鶴藏
金參千円也　辻本　修
金參千円也　大野　茂
金參千円也　森本　隆男
金參千円也　大谷　盛広

計　四万貳千円也

ホ　大一三会　（才二回）

金壹千円也　井波　義吉
金壹千円也　三木甚太郎
金壹千円也　勝野敏夫
金壹千円也　生島　藤藏

計　金四千円也
累計　金參万八千円也

4．其の他の團体

関大一高父兄会

金五万円也　植田　安吉
金五万円也　中田　昌義
金參万円也　長沢喜代一
金參万円也　植田　弘
金參万円也　匿　名　氏
金貳万円也　植田惣次郎
金貳万円也　豆谷兵四郎
金貳万円也　大月勝治郎
金貳万円也　上田　修三
金貳万円也　白井　清吉
金貳万円也　阿部　甚吉
金貳万円也　下条小野右衛門
金貳万円也　十川　忠義
金貳万円也　奥田玉三郎
金貳万円也　宇津呂義雄
金貳万円也　小林　君次
金貳万円也　高久　直信
金貳万円也　杉田　実
金貳万円也　山田　来
金貳万円也　尼崎　愛之助
金壹万円也　森垣　賢一
金壹万円也　岡村幸次郎
金壹万円也　坂東政次郎
金壹万円也　土川　清
金壹万円也　浅井清市
金壹万円也　山口　俊作
金壹万円也　前田　順治
金壹万円也　大谷泰治郎
金壹万円也　若見　好清
金壹万円也　土肥芳左衛門
金壹万円也　伊東　順一
金壹万円也　井内彌三郎
金壹万円也　木本　直吉
金壹万円也　井那　新吉
金壹万円也　谷口　庄吉
金壹万円也　山田佐一郎
金壹万円也　森　時雄
金壹万円也　三浦　三郎
金壹万円也　白石　市郎
金壹万円也　上岡　多藏
金壹万円也　赤土楢三郎
金壹万円也　芥田　武夫
金壹万円也　細原　岩藏
金壹万円也　相馬与市郎
金壹万円也　下雅意亀吉
金壹万円也　大石　雅昭
金壹万円也　井上　千明
金壹万円也　磯田　繁次
金壹万円也　山口　正義
金壹万円也　荒木巳之助
金壹万円也　浅野　誠一
金壹万円也　渡壁　松一
金壹万円也　野村　哲治
金壹万円也　高橋　節治
金壹万円也　牧野彌三郎
金壹万円也　飯田喜代治
金壹万円也　田辺　徳一
金壹万円也　荒木　義彰
金壹万円也　尾沢　順一
金壹万円也　田治　一三
金壹万円也　西川　謙三
金壹万円也　文珠祐三郎
金壹万円也　津田　仁作
金壹万円也　土井　竹男
金壹万円也　北村　彌八
金壹万円也　吉田　徳治
金壹万円也　外島　行雄
金壹万円也　古市　修次
金壹万円也　山口　重治
金壹万円也　辻　武三
金壹万円也　花田定太郎
金壹万円也　貴島　辰雄
金壹万円也　荒川　淑人
金壹万円也　匿　名　氏
金壹万円也　藤森　贊樹
金壹万円也　塚田　義則
金壹万円也　松原　俊男
金壹万円也　東川　末松
金壹万円也　飯尾　岩吉
金壹万円也　片山　亀吉
金壹万円也　出原　一藏
金壹万円也　脇田権治郎
金壹万円也　塩見徳太郎
金壹万円也　佐々木善右衛門
金壹万円也　平井　慶藏
金壹万円也　国枝　よう
金壹万円也　中田　正道
金壹万円也　西　信一
金壹万円也　野村　忠敬
金壹万円也　奈良　三郎
金壹万円也　木下　金助
金壹万円也　多井憲次郎
金壹万円也　吉田　八郎
金壹万円也　鍵田源太郎
金壹万円也　高山　常吉
金壹万円也　森　忠三郎
金壹万円也　岸本　光治
金壹万円也　久保田嘉太郎
金壹万円也　吉田　彌生
金壹万円也　竹中　昇
金壹万円也　桑原　政一
金壹万円也　荒木　雄治
金壹万円也　角家虎三郎
金壹万円也　大垣国太郎
金壹万円也　北村　健藏
金壹万円也　中山左右次
金壹万円也　後田　春夫
金壹万円也　清水　良祐
金壹万円也　豊後昇太郎
金壹万円也　松下繁太郎
金壹万円也　中本三藤郎
金壹万円也　岩田　三二
金壹万円也　千葉　胤嗣
金壹万円也　毛利　喬良
金壹万円也　田端　義一
金壹万円也　三枝　八郎
金壹万円也　河野　重一
金壹万円也　中藏　公夫
金壹万円也　吉田長三郎
金壹万円也　石倉勇三郎
金壹万円也　中井　信治
金壹万円也　土屋　一雄
金壹万円也　細川　豊次
金壹万円也　杉原　義春
金壹万円也　林　トリエ
金壹万円也　田中　示
金壹万円也　沖　克巳
金壹万円也　田村清太郎
金壹万円也　土江　信郎
金壹万円也　山田　勝
金壹万円也　小松　秀義
金壹万円也　石倉　虎市
金壹万円也　近藤　貞

金壹万円也　古山宇一
金壹万円也　下村勝
金壹万円也　後藤銀一
金壹万円也　宮崎利男
金壹万円也　羽矢茂雄
金五千円也　油野武夫
金五千円也　好井喜道
金五千円也　青木喜八郎
金五千円也　河原廉平
金五千円也　小原秋治
金五千円也　生田利満
金五千円也　浦田与一
金五千円也　佐伯駒雄
金参千円也　細川省三
金参千円也　井上五郎
金弐千円也　有田春夫
金壱千円也　錫矢志賀
金壱千円也　前田政常

計　金百七拾壹万円也
累計　金貳百九拾万五百円也

5　個人

金貳万円也　高浜宇佐吉（大15専法）
金壹万円也　東栄（大8専法）
金壹万円也　銀島万作（昭3専法）
金壹万円也　道工隆三（昭2専法）
金壹万円也　田中義一（大15大商）
金参千円也　松井英雄（昭29学一経）
金参千円也　中島利夫（昭18専一商）
金参千円也　柳原豊一（昭26学一経）
金参千円也　北村常雄（昭15大商）
金弐千円也　長島潔（昭11大商）
金壱千円也　河野誠哉（昭11大経）
金壱千円也　川西健（昭28学一法）
金壱千円也　小川東吾（昭29学二英）
金壱千円也　山田尚孝（昭29短大）
金壱千円也　樋口明（昭24専二経）
金壱千円也　鈴木淳三郎（昭17大経）
金壱千円也　宇野貞二郎（昭27学二経）
金壱千円也　吉村利明（昭29学一法）
金壱千円也　村上博美（昭29学一経）
金壱千円也　村井信一（昭12専二法）
金壱千円也　田中章二（昭26専二法）

計　金八万五千円也
累計　金八拾万六千五百円也

四、教育後援会の部（才九回）

金貳百五拾万円也　教育後援会
金參万円也　大岡社喜

金壹万円也　黒川庄次郎
金壹万円也　東栄
金五千円也　宮崎常夫
金五千円也　甲田七五三男
金五千円也　竹中昇
金五千円也　溝口まつ子
金五千円也　小曾根真造
金五千円也　福森高義
金参千円也　芋生信一
金参千円也　岡村良造
金参千円也　下村貞雄
金参千円也　能美清登
金参千円也　余部治一
金参千円也　赤塚幸雄
金参千円也　橋和田恒一
金参千円也　加賀隆一
金参千円也　杉尾透爾
金参千円也　竹岸政則
金参千円也　小山梅太郎
金参千円也　清水市松
金参千円也　国弘安
金参千円也　中井鶴松
金弐千円也　市川清二
金弐千円也　高浜明治
金弐千円也　谷種夫
金弐千円也　近藤辨逸
金弐千円也　栗田吉太郎
金弐千円也　十川忠義
金弐千円也　納谷重一
金弐千円也　林辰雄
金弐千円也　永田多士良
金弐千円也　森本正徳
金弐千円也　前田きよゑ
金弐千円也　南善一郎
金弐千円也　村井庄太郎
金弐千円也　広瀬昇之助
金弐千円也　進藤宇三郎
金弐千円也　安原定吉
金弐千円也　南野辰之助
金弐千円也　田中喜造
金弐千円也　中野恵了
金弐千円也　荒野政吉
金弐千円也　植松蔵吉

金弐千円也　岡本浜太郎
金弐千円也　竹下百馬
金弐千円也　武藤誠一
金壱千円也　植田政利
金壱千円也　中井清阜
金壱千円也　島善次
金壱千円也　松本吉正
金壱千円也　北橋利治
金壱千円也　下田徹正
金壱千円也　横部敬一
金壱千円也　飯尾良宏
金壱千円也　山根勝
金壱千円也　中山勇
金壱千円也　森脇勇吉
金壱千円也　日野義三
金壱千円也　岡田恒男
金壱千円也　尾崎英輔
金壱千円也　大前凉一郎
金壱千円也　北上鼎
金壱千円也　吉本勝
金壱千円也　植村伊一郎
金壱千円也　蓮宮慶治
金壱千円也　岡本晴夫
金壱千円也　青山登志夫
金壱千円也　伊東徳一郎
金壱千円也　村上豊太郎
金壱千円也　道田忠直
金壱千円也　竹元繁
金壱千円也　高野福松
金壱千円也　徳村直
金壱千円也　北牧庄太郎
金壱千円也　伊東武夫
金壱千円也　若林伝二郎
金壱千円也　飯垣清一
金壱千円也　今堀長平
金壱千円也　上山留吉
金壱千円也　小西ヨシオ
金壱千円也　小端達夫
金壱千円也　永野彌三郎
金壱千円也　村上春義
金壱千円也　堀富美枝
金壱千円也　松本藤永
金壱千円也　北村マサエ

金壱千円也　村岡宣郎
金壱千円也　福原宗二
金壱千円也　稲山勇次郎
金壱千円也　向井猪三郎
金壱千円也　岡崎敬之輔
金壱千円也　端山兵一
金壱千円也　森増郎
金壱千円也　向井甚右衛門
金壱千円也　辻徳次郎
金壱千円也　細井真太郎
金壱千円也　田中正雄
金壱千円也　植田義一
金壱千円也　山本次郎
金壱千円也　殿谷伊勢三
金壱千円也　宮本岩太郎
金壱千円也　坂根末人
金壱千円也　真瀬元雄
金壱千円也　奥野伊勢治
金壱千円也　下中忠一
金壱千円也　三上貞夫
金壱千円也　降井町
金壱千円也　佐古保
金壱千円也　西尾義撰
金壱千円也　辻幾蔵
金壱千円也　畠かずゑ
金壱千円也　金江豊太郎
金壱千円也　木村甲辰
金壱千円也　多田梅吉
金壱千円也　西田市松
金壱千円也　青利一
金壱千円也　福井利重
金壱千円也　木下末吉
金壱千円也　喜多隆
金壱千円也　降矢保夫
金壱千円也　林盛勝
金壱千円也　中島鉄五郎
金壱千円也　小野歌之輔
金壱千円也　桝井庄三郎
金壱千円也　山口礼一
金壱千円也　岩井万之助
金壱千円也　小山徹雄
金壱千円也　郡山季治
金壱千円也　今里実

金壹千円也　岩井四郎
金壹千円也　角田憲二
金壹千円也　秋山尚男
金壹千円也　森田嘉夫
金壹千円也　河竹正一郎
金壹千円也　杉山栄一
金壹千円也　西浦三治郎
金壹千円也　田原秀雄
金壹千円也　南川秀之助
金壹千円也　酒井寛二
金壹千円也　板金光造
金壹千円也　伊藤春男
金壹千円也　八代芳孝
金壹千円也　佃啓三
金壹千円也　安田六三郎
金壹千円也　寺岡倉一
金壹千円也　平九重
金壹千円也　浪花寺三郎
金壹千円也　梅本ヨシコ
金壹千円也　野村勝三
金壹千円也　野村勝三
金壹千円也　橋本恵夫
金壹千円也　北浦彌三郎
金壹千円也　大谷和夫
金壹千円也　橘秀子
金壹千円也　木村てるゑ
金壹千円也　中尾保
金壹千円也　津田健一
金壹千円也　平井喜一
金壹千円也　中尾ヒデ
金壹千円也　永井勝蔵
金壹千円也　平井彦一
金壹千円也　七井原信五郎
金壹千円也　木村辰三
金壹千円也　大和芳太郎
金壹千円也　杉本時三
金壹千円也　彌屋田助
金壹千円也　池田秀夫
金壹千円也　大西ユキエ
金壹千円也　津川武平
金壹千円也　寺岡竹次
金壹千円也　田中重一
金壹千円也　瓜生近彌
金壹千円也　林義光
金壹千円也　佐藤博
金壹千円也　水谷トキ
金壹千円也　小椋義作
金壹千円也　藤原晶
金壹千円也　福島佐和悦
金壹千円也　津田亮三
金壹千円也　藤原輝司
金壹千円也　小西伊兵衛
金壹千円也　山村豊
金壹千円也　中田重助
金壹千円也　田中欣二
金壹千円也　中西富志夫
金壹千円也　藤原助五郎
金壹千円也　大杉正雄
金壹千円也　増山喬
金壹千円也　荒木吉司
金壹千円也　間所百三
金壹千円也　内藤義雄
金壹千円也　桜井利一
金壹千円也　羽柴巌
金壹千円也　土谷清三郎
金壹千円也　岡本美徳
金壹千円也　登山正夫
金壹千円也　石田治
金壹千円也　井沢鏞吉
金壹千円也　木戸松生
金壹千円也　森市松
金壹千円也　岸上喜代治
金壹千円也　塚田常治郎
金壹千円也　高田利一郎
金壹千円也　中野好三
金壹千円也　辻本常次郎
金壹千円也　小畑道次郎
金壹千円也　南幸次
金壹千円也　中平英夫
金壹千円也　後藤市松
金壹千円也　樋口富佐惠
金壹千円也　林元徳
金壹千円也　徳山進
金壹千円也　糠野元次郎
金壹千円也　重見新九郎
金壹千円也　原満二
金壹千円也　安藤勝利
金壹千円也　中熊高重
金壹千円也　中西助一
金壹千円也　福本岩三
金壹千円也　岡崎義一
金壹千円也　中川徳良
金壹千円也　藤野茂次郎
金壹千円也　淵野信行
金壹千円也　荻野善三郎
金壹千円也　黒岩鳴実
金壹千円也　坂口勇
金壹千円也　北川春一
金壹千円也　胡本栄松
金壹千円也　安田茨男
金壹千円也　岩井晴治
金壹千円也　牧茨
金壹千円也　桜井真毅
金壹千円也　岡倉崩
金壹千円也　楠留子
金壹千円也　津田省三
金壹千円也　中川昇一
金壹千円也　横谷円二
金壹千円也　小山真一郎
金壹千円也　井田直三
金壹千円也　浅堀実
金壹千円也　高阪晃一
金壹千円也　小島岩次郎
金壹千円也　多田克
金壹千円也　森本政一
金壹千円也　藤井千代子
金壹千円也　金原藤吉
金壹千円也　柏原玉次
金壹千円也　野崎正男
金壹千円也　森田定子
金壹千円也　盛太吉
金壹千円也　松浦清治
金壹千円也　池田愈幾人
金壹千円也　蓮室芳一
金壹千円也　山本金一
金壹千円也　宮内堅雄
金壹千円也　原田新一
金壹千円也　神田吉之助
金壹千円也　神野壽
金壹千円也　高木志茂子
金壹千円也　山口康子
金壹千円也　神代良馬
金五百円也　森村栄雄
金五百円也　牧野正治

計　金貳百八拾七万八千円也
累計　金八百五拾七万五千七百円也

五、學校法人關西大學の部

評議員

金七万円也　阿倍甚吉（才一・二回合計額）
金五万円也　下条小野右衛門（才一―三回合計額）
金參万円也　高椋正次
金參万円也　高垣善一
金貳万円也　大月伸
金貳万円也　木原繁実

計　金貳拾貳万円也
累計　金百貳拾八万七千円也

六、教育職員の部

大学

金壹万円也　内田修
金弐千円也　名取栄史
金弐千円也　田中英三
金弐千円也　蘭田香融
金弐千円也　多田敏男

計　金壹万八千円也
累計　金百七拾九万貳千円也

七、事務職員の部

金壹千円也　井谷健二
金壹千円也　百北恒博

計　金貳千円也
累計　金百壹万參千円也
合計　金八百五拾參万七千八百円也
總計　金參千六百貳拾万七千百四円也
（合計・累計は重複申込を含まない実寄附金額である）

寄附金分類別集計表

昭和二十九年九月三十日現在

申込種別	件数	金額
篤志家	六六	九七九三、七四〇・〇〇
関係業者	四七	六、九七〇、五〇〇・〇〇
校友 地方支部	一九	三、四三五、〇〇〇・〇〇
校友 職域会	一〇	三四五、〇〇〇・〇〇
校友 同期会	一一	二、六三〇、五〇〇・〇〇
校友 その他団体	五	二、九〇〇、五〇〇・〇〇
校友 個人	二六	八〇六、五〇〇・〇〇
校友 計	二六	九、二五五、五〇〇・〇〇
教育後援会	三	八、五五五、五〇〇・〇〇
学校法人役員	三	九五〇、〇〇〇・〇〇
評議員	五一	一、三八七、〇〇〇・〇〇
教育職員 大学	一〇四	一、七六三、〇〇〇・〇〇
教育職員 一高	二四	一三〇、〇〇〇・〇〇
教育職員 中	一七	七八、〇〇〇・〇〇
教育職員 幼稚園	五	五、〇〇〇・〇〇
教育職員 計	一、九七九	一、〇一三、〇〇〇・〇〇
事務職員	二四六	三九、五四一、四〇四・〇〇
合計		三、三五四、三〇〇・〇〇
内重複額		三六、二〇七、一〇四・〇〇
差引合計		三五、六二八、〇九九・〇〇
收納額		一〇、五八九、〇一五・〇〇
未收納額		

關西大學創立七十周年記念
拡充資金募集趣意書

わが關西大学は、明治十九年河内町の一隅に、大阪に於ける唯一の法律学校として開校したのでありますが、爾来六十有余年校友先輩の苦心と不断の努力に依つて目覚ましい発展を遂げ、今や一万数千の学徒を擁する私学の雄として、自他共に許す一大学園となりました。其の間幾多の俊英を輩出して、文化の向上、国家社会の進運に大きな寄与をなし得たことは、われわれの深く喜びとするところであります。学園発展のために尽瘁せられたそれらの先輩各位に対しては深甚の敬意と感謝を捧げずには居られません。

日本は、漸く独立国家として出発しましたが、国家の前途は甚だ多難であります。わが国は今後、文化国家として世界文化に貢献すべきであります、またそれによつて友邦の信に応えなければなりませんが、そのためには、教育の振興こそ最も緊要な問題であります。

本学は、大学の崇高な使命を自覚すると共に、歴史と伝統に立脚して、よくその声価を揚げて参りましたが、真理の討究、学の実化という理想に向つて、益々邁進したいと思います。本学が新学制に基き、各大学にさきがけて、大学院を設置し、修士課程並びに博士課程を開講したのも要は、その意味において将来の飛躍的な発展を意図したからに外なりません。

本学は時代の趨勢に鑑み、曩に五ヶ年計画を樹て、諸施設の改善充実に着手致しました。千里山における大学院、大学ホール、経済学部商学部教室の増築等はその一環として既に竣工しましたが、なお計画中の事業で、しかも緊急を要するものが種々残されて居ります。即ち、使用上すでに危険な状態にある、千里山法学部文学部学舎の改築、二部学生を収容するための天六学舎の増築、学生に対する施設の一部として、千里山尚志館（学生食堂学友会部室）の増改築等でありますが、これらは逐次工事に着手し或は着工準備中でありますが、その大部分は、臨時的なもので、更に近代的設備を持つ研究室の新築を構想中であります。これらが竣工の暁には学園は全く面目を一新すると思います。

こうした外観の整備と相俟つて、特に重要なものは、大学の真価を決する教授陣容の充実であります。二十八会計年度においては教授十名、助教授八名、専任講師五名、助手十七名の増員を予定しましたが、その大半はすでに補充致しました。

教職員の待遇については、常にこれが改善に努め、本年度においても相当額の増俸を実施致しました。しかしなお現下の経済状態に即応すべき所期の目的を十分に達し得て居ないのを遺憾と致します。

教授陣容の充実と共に、研究用図書の完備も大切でありますが、この点についても目下鋭意努力して居ります。

さて、上記の事柄は、いづれも緊急を要するもののみと考えられますが就中、学舎の増改築は、最早一日も遷延を許しませんので、これを早急に達成するため、昭和三十年度に創立七十周年を迎えるのを機会に、その記念事業の一部として実施することに致しました。しかも、建築費だけでも総額約三億円を要するのでありますが、戦後の経済的混乱により本大学法人の経理も、種々困難な事情を加えており、従つて事業遂行の資金は、止むを得ず関係者各位その他の御援助により御醵出を仰がねばならぬ実情にあります。

大学の生命は不朽でありますが、学園の生々発展を希うためには、各位の学園に寄せられる深い愛情と熱意に俟たねばなりません。翼くは、学園の繁栄を念願する各位の御賛同を請い、この七十周年記念事業の完成を期したいと思います。各位の御賛同により本事業完成の暁には、学園はさらに新たな基盤に立つて飛躍的な発展を期し得ることを信じます。何卒御協力の程切に願上げます。

昭和二十八年十一月

關西大學學長　岩崎卯一
關西大學理事長　白川朋吉

創立七十周年記念事業学舎増改築概要

一、工事費総額約三億三千五百万円

二、工事概要

(一) 千里山法学部文学部学舎改築（鉄筋コンクリート造）
　三階建　二千六百六十八坪　工費約二億六千四百万円

(二) 天六学舎増築（鉄筋コンクリート造）
　五階建　三百七十八坪　工費約三千万円

(三) 千里山尚志館増改築（木造）二階建　三百二十一坪　工費約六百万円

(四) 関西大学第一高等学校の千里山外苑への移転新築（一・二階鉄筋三階木造）三階建　七百八十五坪　工費約三千五百万円

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和二十九年十月十五日発行（毎月一回十五日発行）